

介護現場に好循環をもたらす 生活支援記録法 (第3回:最終回)

～生活場面面接・生活支援記録法の効果的な研修プログラム

特別企画

埼玉県立大学 保健医療福祉学部 准教授 **鳶末憲子**

日本社会事業大学大学院社会福祉学専攻科博士前期課程修了。大学病院(看護師)、訪問介護事業所(非常勤ホームヘルパー)、医療福祉系専門学校の教員などを経て現職。主な著書に『高齢期の生活と福祉』(山田知子編, 放送大学教育振興会, 2015年), 『介護導入テキスト Care Introductory Training』(国際厚生事業団, 2014年), 『技術と実践』(2014年度版介護職員初任者研修テキスト第4分冊, 介護労働安定センター, 2014年), 『介護・福祉の制度とコミュニケーション』(介護職員初任者研修テキスト第2巻, 日本労働者協同組合〈ワーカースコープ〉連合会, 2014年), 他多数。



国際医療福祉大学 医療福祉学部 教授 **小嶋章吾**

東京都立大学大学院社会科学専攻科博士課程単位取得満期退学。医療ソーシャルワーカーを経て現職。主な著書に『社会福祉援助の共通基盤(上)』(第2版)(日本社会福祉士会編, 中央法規出版, 2009年), 『医療ソーシャルワーカーの力』(村上須賀子, 竹内一夫編著, 医学書院, 2012年), 『ソーシャルワーク記録』(副田あけみ, 小嶋章吾編著, 誠信書房, 2006年), 他多数。



今回は、生活支援記録法に関心を持った方が、主体的に取り組んでいただけるような演習企画を紹介します。

生活支援記録法は、ICF、生活支援、ストレングス視点、利用者中心主義といった理論に基づいていることや、介護プロフェッショナルキャリア段位制度^{*1}との関連についてはこれまでに触れませんでした。紙幅の都合上、理論的背景の理解を深めるための教材そのものを紹介することはできませんが、筆者が開発してきた教材を列挙しておきます(表1)。

4段階の研修プログラム

筆者はこれまで、新潟県介護福祉士会などによるファーストステップ研修のプログラムの1つとして、またA県のB居宅介護支援事業所における介護支援専門員を対象とした実践的研究や、本企画の第2回(本誌Vol.13, No.2)で紹介した特別養護老人ホームこうめの里における生活場面面接・生活支援記録法の研修プログラムとして、次のような4段階を経て生活支援記録法の導入を進

※1 介護プロフェッショナルキャリア段位制度¹⁾では、評価の根拠やOJTに活用する観点から記録の整備が求められています。

めることが重要であることが分かりました。

第1段階:生活支援の理論(生活場面面接など)

への理解を深める必要性を共有する段階

第2段階:「生活場面面接ワークシート」の試行・活用の段階

第3段階:「生活支援記録法」の個人による試行段階

第4段階:「生活支援記録法」のチームでの共有・試行・定着の段階

以下、文中の■部分は、本企画の第1回(本誌Vol.13, No.1)と第2回に掲載されたものです。

生活支援の理論に基づいて生活支援記録法を導入するに当たっては、「生活支援(生活場面面接・生活支援記録法)による実践・OJTを通じた変化」(第2回P.79, 図参照)が示すように、第1段階から段階的に進めていくことが理想的ですが、生活支援記録法そのものは、現場の状況に応じて第2段階以降のいずれの段階からでも実施することが可能です。

●**第1段階**:生活支援の理論

(生活場面面接など)への理解を深める必要性を共有する段階

生活支援記録法は、生活支援を通じた利用者と

〔表1〕生活支援記録法の理論的背景を学ぶための教材（太字は特に重要なもの）

①生活の特性（多面性・構造・連鎖性など）
② 介護実践の特性
③統合的援助がもたらす効果
④IPW（多職種連携実践）の構造と要素
⑤ICF版の介護実践構造図（利用者と環境・ケアチームとの相互作用／生活支援のためのケアマネジメントと個別介護計画／利用者ニーズ中心の目標指向型の介護過程）
⑥ICFの構成要素の内容（生活モデルの理解に必要なものを例示）
⑦ ICFの特性から介護福祉専門職への期待
⑧ICFにおける生活モデルの適用～ICFと生活ニーズとの関係
⑨ 介護過程と生活支援技術～ICFの視点による実行状況・生活場面でのアセスメントの特徴
⑩ 実行状況・生活場面でのアセスメントの効果～意図的・段階的な展開場面の分析

のコミュニケーションが多様な影響をもたらすと考え、それを効果的・効率的に記録するための方法であることから、利用者とのコミュニケーションの意味を理解する必要があります。

まず、支援困難な利用者や、よくあるような拒否的な場面において、意図的なかかわりができているか、うまく対応できた場面がチーム内で共有状況などをディスカッションします（表2）。

次に、意図的なコミュニケーションの必要性を共有するため前述の内容について学習し、実践とICFや生活モデルを背景とした生活場面面接については、表3に示したような内容・考え方を学びます。生活場面面接の定義 および「利用者の持てる力を高めるプロセスの結果図」（第1回参照）は教材となるテキストなども刊行されていますので、参考にしてください。

すでに、パーソン・センタード・ケアやユマニチュード、回想法や学習療法などを導入し、基本

〔表2〕介護における意図的なコミュニケーション（場面・共有の必要性）

意図的なコミュニケーションが有効だと考える利用者・場面
<ul style="list-style-type: none"> ・支援困難な利用者や、よくあるような拒否的な場面などを思い起こす。 ・利用者の持てる力を高めることができた場面では、なぜそのようにできたのか。
うまく対応できた時、介護にそれを活用できているか
<ul style="list-style-type: none"> ・個人で振り返りができているか。 ・チームで共有できているか。

〔表3〕生活場面面接研修の主な内容

①生活支援であるケアと一体的なコミュニケーションの可視化～生活場面での面接として
②生活支援としての生活場面面接の定義・効果
③利用者の持てる力を高める生活場面面接のプロセス・生活場面面接の典型例
④生活場面面接と学んできたコミュニケーションとの関係
⑤生活場面面接の概念・特徴的な場面・チェックリスト
⑥「生活場面面接ワークシート」の意義・典型例
⑦「生活場面面接ワークシート」の書き方
⑧「生活場面面接ワークシート」を用いたロールプレイ
⑨「生活場面面接ワークシート」の活用による場面・事例分析

的なケアとしてコミュニケーションを重視してきた場合は、生活場面面接研修はあえて必要ないと考えるかもしれませんが、「生活支援記録法の特徴と効果」（第1回参照）とコミュニケーションについての理解や説明が十分でない場合には、第1段階（表1）の内容を確認することを推奨します。

◎第2段階：「生活場面面接ワークシート」の試行・活用の段階

生活場面面接の意図的な実践をリフレクション^{※2}し、活用した「生活場面面接プロセス概念」^{※3}、コミュニケーションやカウンセリングの技法など

※2 リフレクションとは、「リフレクションは通常、省察あるいは内省、熟考と訳される。リフレクションは体験を通して生じた驚きや謎、気になることなどについて、その現象と自分の理解 について考えることである。多様な見方・考え方を検討することによって自分の見方・考え方に変化がもたらされる」というものです²⁾。

※3 生活場面面接プロセス概念とは、生活場面面接による利用者の「持てる力」を高めるプロセスを構成する、「意味・方向性の探索」などの20の概念を指しています³⁾。

の能力を高める段階です。具体的には、「生活場面面接ワークシート」を記載してリフレクションをしたり、ロールプレイを行ったりします。「生活場面面接ワークシート」は、もともと生活場面面接を意図的に活用できるようになるための訓練用の教材として開発したもので、第1回P.76の表9に、その理論的根拠を図示しています。「生活場面面接ワークシート」は、同時に生活支援記録法の訓練用の教材としても活用することができます。

これまでの研修では、「生活場面面接ワークシート」を通じて、困難場面への解決方法を見いだすほか、チームとしてのケア方法の統一、事例検討の活用、場面集の作成など、有意義な成果が生まれてきました。「生活場面面接ワークシート」の記入方法は後に紹介します。このように、「生活場面面接ワークシート」により、生活場面面接の意図的な実践を図ることはできますが、その実践を日々の経過記録に記すことが求められることから、生活支援記録法を開発するに至りました。

〔表4〕生活支援記録法を試行した研修受講者の特徴
(新潟県介護福祉士会ファーストステップ研修の場合)

- ケアプランと連動したモニタリングに経過記録を役立てたいという動機がある。
- 職場の記録委員会などに所属していたり、観察力や気づきを高めたいという動機がある。
- 意図的なコミュニケーションの記録ができないことへの問題意識がある。
- 困難場面への対応などを共有しようと試行錯誤した経験がある。
- SOAPを用いた記録では、ケアの内容を書きにくいことへの疑問がある。
- フォーカス・チャータリングを用いた記録では、アセスメントやケアプランと結び付きにくいことへの疑問がある。
- ケアプランに基づく意図的なケアを展開しているが、経過記録に記載できていないことへの問題意識がある。
- 生活場面面接での学びと関連づけ、生活支援記録法に着目する。

この第2段階から始めることを選択する場合は、生活支援記録法の導入に先立って、「生活場面面接ワークシート」による訓練が有効であると説明して進めるとよいでしょう。ただし、実際に業務で使用している記録の様式に、「生活場面面接ワークシート」の内容をそのまま記載することは困難ですので、そこから生活支援記録法の必要性の共有化を図ります。

●第3段階：「生活支援記録法」の個人による試行段階

認知症ケアや個別ケアを重視する中で、介護職の気づきや観察力、コミュニケーション力が高まっていますので、こうした介護職による意図的な実践を記録する方法への関心がある場合には、すぐにでも始めることができます。施設全体で生活支援記録法をすぐに導入できない場合でも、まずは職場での理解を得た上で一人の介護職が試行することもできます。

具体的な事例を紹介しましょう。日本介護福祉士会によるファーストステップ研修の科目「的確な観察・記録とチームケアへの展開」の事後課題(学んできた複数の記録法の中で、特定の記録法を用いてある場面を記録し、その感想をまとめるという課題)において、生活支援記録法を選択した研修受講者の感想には、表4に示すような特徴がありました。

表4のような問題意識を持つ方は、職場の記録委員会やリーダーなどに相談して、生活支援記録法にチャレンジしてみたいはいかがでしょうか。

「生活支援(生活場面面接・生活支援記録法)による実践・OJTを通じた変化」の成果が示唆するように、生活支援記録法の試行により、どのような変化があったのかについて評価することが重要です。または、「生活支援記録法の特徴と効果」にて確認してもよいでしょう。

◎第4段階：「生活支援記録法」の チームでの共有・試行・定着の段階 ～介護現場の好循環について

3回にわたる本企画を熟読していただき、引用文献にあるような筆者が作成してきた教材を用いることにより、第4段階から実施することも可能だと思われませんが、ワークブックのような演習用の教材ははまだ準備できていないため、現時点では少なくとも第3段階からの実施をお勧めします。

「生活支援（生活場面面接・生活支援記録法）による実践・OJTを通じた変化」が示すように、生活支援記録法を活用した個人の感情・行動・思考の変化と共に記録を共有することで、組織・チームにも変容が生まれます。第2回で紹介した特別養護老人ホームこうめの里の実際では、このようなプロセスの一部を確認することができます。

生活支援記録法を試行後、介護の好循環にどのように影響したかを評価し、今後の活用のあり方を検討していきましょう。次に、「生活場面面接ワークシート」について紹介します。

「生活場面面接ワークシート」の活用

◎「生活場面面接ワークシート」の記入

「生活場面面接ワークシート」の記入例を表5に示します。

ここで、「生活場面面接ワークシート」の書き方について説明しましょう。

「生活場面面接ワークシート」は、事例検討のための用紙ではありませんので、取り上げる利用者のプロフィールを詳しく紹介する必要はありません。また、かかわりの始まりから終わりまでの援助過程をすべて記入する必要もありません。介護職による利用者とのちょっとしたコミュニケーションを手軽に記入することができ、同時にリフレクションに役立てることができます。

利用者とのコミュニケーションのどんな場面で

も取り上げることができますが、利用者とのやり取りの中で、特にうまく対応できたと考えられる場面を取り上げると、生活場面面接の効果が実感できるでしょう。

記入方法は、表6のとおりです。

◎ロールプレイ

次に、「生活場面面接ワークシート」を活用したロールプレイの方法を説明します。ロールプレイとは、役割演技のことを言います。担当した役割になりきって演技してみましょう。

- ①「生活場面面接ワークシート」を持ち寄ります。
グループの人数分用意し配布します。
- ②「生活場面面接ワークシート」の作成者は、そこに書かれた言動を中心に、一人芝居のようにやって見せます。「意味づけ」については簡単に説明します。
- ③「周りの状況・様子」に出てくる環境（居室やベッド周りなど）を設定します。
- ④ロールプレイでは、次のような役割を分担し、役割交代の順番を決めます。
 - ・利用者役（最初は「生活場面面接ワークシート」の作成者が分担します）
 - ・「周りの状況・様子」に出てくる家族などの第三者役
 - ・実践者役
 - ・観察者役（第三者がいない場合には、観察者役は2人になります）※ロールプレイのたびに全員が役割を交代し、すべての役を経験します。
- ⑤「生活場面面接ワークシート」の作成者は、次のような順番で役割を交代します。
1回目（利用者役）→2回目（家族などの第三者役）→3回目（観察者役）→4回目（実践者役）
- ⑥ロールプレイは、「生活場面面接ワークシート」の「周りの状況・様子」「利用者の言動」「援助者の言動」の部分に基づきやりとりを行います。

[表5] 生活場面面接ワークシートの記入例

その場面を取り上げた理由：利用者の自己表現が見られ、夫のAさんへの理解が深まるなど多くの効果が得られたため。				
事例の概要：Aさん、65歳の女性。全面介護の状態。ほとんど発語はなく、叫び声を上げるか痛いと訴える程度。夫が時々見舞いに来ている。				
援助目標：①Aさんの自己表現の促進や意欲の向上、②夫のAさんへの理解促進と介護意欲の向上。				
A. 周りの状況・様子 (環境) (話し言葉は「 」書き)	B. 利用者の言動 (話し言葉は「 」書き)	C. 援助者の 思い	D. 援助者の言動 (話し言葉は「 」書き)	E. 意味付け(振り返り) (●印は、生活場面 面接プロセス概念)
<p>①夫から、孫からAさん宛てに誕生日カードが送られてきていると聞いていた。</p> <p>⑥夫は「どうせ、おまえなんか見ても分からないと思って黙っていたんだけど、孫から誕生日カードが来ていたよ」とバツが悪そうな様子。</p> <p>⑧夫は誕生日カードをすぐに見せてくれた。</p> <p>⑫夫「こいつが笑ったり泣いたりするなんて。何を言っても分かんないと思っていたから何も話さなかったのに…」</p> <p>⑮普段は怖い顔をしている夫の目も潤んできた。</p>	<p>②全く感情や意欲を示さない。</p> <p>⑤わずかながら表情が和らいだ。</p> <p>⑪Aさんの顔がほころび、カードを握っていたAさんの手に少し力が入った様子。Aさんの目が少し潤んできた。</p>	<p>③孫のことを話題にしてみよう。</p> <p>⑩孫との楽しい思い出が浮かんできたのだろうか。カードに書かれた手紙と一緒に読んでみよう。</p> <p>⑬Aさんの気持ちに応えたい。夫との関係を取り持つことができるかもしれない。</p>	<p>④「お孫さんは最近どうされていますか？」</p> <p>⑦「Aさんと一緒に見たいです」</p> <p>⑩カードの言葉を読みながら、「お孫さん、Aさんを大切に思っているんですね」と話しかけた。</p> <p>⑭「Aさんはいろいろと分かっているじゃないですか、ご主人とお話しされたかったですね」と、Aさんの手を握り返した。</p>	<p>孫への関心を確認した ●意味・方向性の探索</p> <p>誕生日カードを見ることを促した ●日常生活素材の活用 孫との楽しい記憶を共有 ●安定や元気を呼ぶ 記憶回復の演出</p> <p>大切にされている実感を呼び起こした ●大切にされている 実感の覚醒・強化 ●世界を拓げる自己表現の促し</p> <p>Aさんの喜びを夫にも共有してもらえたようだ ●家族・生活環境を やんわりと整える</p>
<p>⑰夫がAさんに「ケアワーカーさんに手を振らないの？」と勧めた。</p>	<p>⑱普段ほとんど動作のないAさんが手を振ら上げた。</p>		<p>⑯退出時、「Aさんの笑顔が見られたのでうれしかったです。私も元気が出ました」と、手紙を見せてくれた夫に感謝し、その行為を賞賛した。</p> <p>⑰「Aさんには手紙がいいみたいですね。私もAさんに今日のような笑顔を見せてもらえるように頑張りますから」</p>	<p>夫婦間の感情の交流に、援助者としての率直な感情を表現してみた ●喜楽の醸成・瞬間 呼応</p> <p>今日のやり取りの意味を今後に生かしたいと考えた ●道筋をつけてつな げる</p>

それぞれ臨場感あるロールプレイを行ってください。

- ⑦ディスカッションを行います。1回のロールプレイごとに、次の⑧、⑨のようなディスカッションをします。目的や時間に応じて、メモを記入しておき、全員の役割交代が終わった後にまとめてディスカッションする場合があります。
- ⑧ロールプレイ終了後、それぞれの感想を述べます。

- ・家族などの第三者役や利用者役は、家族や利用者の思いと共に、ホームヘルパー役の言動について、感じたり考えたりしたことを話します。
- ・観察者役は、利用者役や家族などの第三者役の言動を踏まえ、ホームヘルパー役の言動について感じたり考えたりしたことを話します。
- ・実践者役は、家族などの第三者役や利用者役、

[表6] 生活場面面接ワークシートの記入方法

その場面を取り上げた理由：生活場面面接の意図的な活用との関連が分かるように記入します。				
事例の概要：年代、性別、要介護度、主な傷病名や障害名、大まかな家族構成など、利用者や家族をイメージできる程度の内容で構いません。事例検討を目的としているわけではありませんので、事例の概要が分かる程度の最低限の情報だけ記入します。				
援助目標：取り上げた場面に関連する援助目標を記入します。援助目標のすべてを記入する必要はありません。				
A. 周りの状況・様子 (環境) (話し言葉は「 」書き)	B. 利用者の言動 (話し言葉は「 」書き)	C. 援助者の思い	D. 援助者の言動 (話し言葉は「 」書き)	E. 意味付け (振り返り)
<p>援助者と利用者とのコミュニケーションの内容に関連する、周りの状況や様子を記入します。</p> <ul style="list-style-type: none"> 利用者の周りにある家具調度品、飾り物、スイッチの入ったテレビで放送されている番組内容、ペットなどの様子 ほかの利用者などの言動 	<p>利用者の言葉のほか、動き、表情、態度、言葉のニュアンスなどを記入します。</p> <p>話し言葉については、「 」書きで示します。</p>	<p>援助者の思いについて記入します。</p>	<p>利用者の言葉のほか、動き、表情、態度、言葉のニュアンスなどを記入します。</p> <p>話し言葉については、「 」書きで示します。</p>	<p>援助者と利用者とのコミュニケーションにどのような意味があったかを、現時点で振り返って、その意味を記入します。</p> <p>記入例では、「意味づけ」に対して、●印で「生活場面面接プロセス概念」を当てはめてありますが、自分の言葉で表現してみるものよいでしょう。</p> <p>援助者のかかわりが、利用者にどのような援助効果をもたらしたかを考えてみるとよいでしょう。</p>
時間的な順序を示すために、文頭に、①②③…と数字を振っておくとよいでしょう。				
↑				
場面に時間的な区切りがあれば、このようにワークシートの途中を点線で区切っておけば分かりやすいでしょう。				

観察者役が話したことに対して、感じたり考えたりしたことを話します。

⑨「意味づけ」について検討します。

- ・「生活場面面接のプロセス」(第1回P.76の図1)を活用して、生活場面面接における流れを確認します。
- ・「意味づけ」について検討します。「意味づけ」についてグループで合意に達する必要はありません。「生活場面面接ワークシート」の作成者が考えてきた「意味づけ」以外にも、複数の意味づけができる場合もあります。
- ・実践者による意図的な生活場面面接が、利用者にとってどのような援助につながっていったのかについての理解が深まり、今後似たような場面で活用できるようになることが期待されます。

⑩「生活場面面接ワークシート」の作成者は、ディスカッションを終えて、改めて感じたり考えたりしたことを話します。

※本企画で紹介した生活場面面接プロセス概念やカテゴリーは、木下康仁先生(立教大学)が提唱したM-GTA(修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ)という理論生成のための質的帰納的研究法によるものです。

生活支援記録法にチャレンジ

では、ここで生活支援記録法にチャレンジしてみましよう。次のような場面をどのように記録すればよいでしょうか。

◎演習1：叙述体による経過記録を基に項目をふる(表7,8)

Bさんは、75歳の男性です。認知症のため帰宅願望が強く、夕食後は決まって不穏状態が見られます。この日も夕食後、居室に誘導してしばらくした後、様子を見るため、介護職がBさんの居室を訪問した場面です。ところがBさんは居室におらず、フロアをうろうろしている姿が見つかります。ケアプランでは、帰宅願望への対応として、長男と電話で話してもらうことで気持ちの安定を図ることとしており、介護職は今回も、Bさんに

[表7] 叙述体を用いた経過記録

月日	時間	F	事項
〇/〇	〇:〇	様子	<p>Bさんは「帰る、帰る」と落ち着かない様子で、フロアをうろうろしていた。</p> <p>そこで、ケアプランに沿って、Bさんの気持ちの安定を図ることができればと、その場で長男に連絡し、「ご長男さんが電話に出ておられますよ」と、携帯電話をBさんに渡した。</p> <p>Bさんは長男の話に納得し落ち着いた様子で、「泊まってもいいそうだから、泊まらせてもらいます。(長男は) どんなに忙しいんだろうね」と、うまく説明された。</p> <p>長男の声を聞き、安心感を持つことができるようだ。帰宅願望は繰り返し見られるものの、このような対応は本人のために続けるのが望ましいだろう。</p>

長男の声を聞かせて安心してもらおうと意図しての訪室でした。

表7は、その時の場面を、叙述体を用いて記録したものです。「F」欄には、「様子」と入力されています。このような叙述体で書かれた記録について、生活支援記録法を用いて記録するとどのようになるのでしょうか。生活支援記録法で用いる項目は、次のとおりです。これらの項目を「事項」欄の該当箇所につけてみましょう。

- F：着眼点，ニーズ，気がかり
- S：主観的情報，利用者の言葉
- O：客観的情報，観察や他者から得られた情報，反応
- A：アセスメント，気づき，判断
- I：援助者の対応，声かけ
- P：計画，当面の対応予定

ここで生活支援記録法を用いた記録例(表8)をご覧ください。

この場面はどのような場面であったかを考えて

[表8] 生活支援記録法の項目をふった場合

月日	時間	F	事項
〇/〇	〇:〇	気持ちの安定を図る	<p>S/O：「帰る、帰る」と落ち着かない様子で、かばんを持ってフロアをうろうろしていた。</p> <p>A：ケアプランに沿って、Bさんの気持ちの安定を図ることができればと、長男と話してもらったのがよいと考えた。</p> <p>I：その場で長男に連絡し、「ご長男さんが電話に出ておられますよ」と、携帯電話をBさんに渡した。</p> <p>S/O：長男の話に納得し落ち着いた様子で、「泊まってもいいそうだから、泊まらせてもらいます。(長男は) どんなに忙しいんだろうね」と、うまく説明された。</p> <p>A/P：長男の声を聞き、安心感を持つことができ気分転換を図ることはできるようだ。帰宅願望は繰り返し見られるものの、このような対応は本人のために続けるのが望ましいだろう。</p>

みましょう。Bさんの帰宅願望に対して、介護職はBさんに長男と携帯電話で話をしてもらうことによって、Bさんの気持ちの安定を図り、安心感につながっていることが注目できます。

この場面であれば、「気持ちの安定を図る(ことのできた場面)」ですから、「F」としては、「気持ちの安定を図る」といった表現にするとよいでしょう。

なお、手書きの記録ですと、「F」欄に相当する欄がない場合もありますので、「F」の内容は、日付のすぐ下に記入するか、「事項」欄の1行目に記入してもよいでしょう。

●演習2：添削例と「F」の表現を考える(表9)

表9と表10では添削としてのコメントを付記しています。研修では、留意点として示したりしましたが、研修に協力してくださった皆さんからは、添削の希望もありました。ここでは、添削(コメント)も踏まえ、「F」について考えてみましょう。

「F」には、おおよそ3つの表現があります。

[表9] 添削例から「F」の表現を考える場合

年月日	時間	F	事項
〇/〇/〇	〇:〇	塗り絵に取り組む	<p>O：入浴後も体調がよいようで、テーブル席で塗り絵に取り組んでいる。</p> <p>I：いつも同じ絵を書いており、マンネリ感があるので、別の下絵を渡した。</p> <p>S/O：下絵を見て「誰が書いたん？ 上手だわ」と感心し、色塗り作業に進まず。</p> <p>I：色鉛筆が整理されていないので、取り組みやすいように、鉛筆削りをして整え、塗り絵を勧めた。</p> <p>S/O：少しだけ色塗りするが、すぐに手が止まり、新しい下絵を見ながら、「誰が書いたんだろう」「可愛いわ」と感心して眺めてばかり。</p> <p>A：不慣れな絵で見本がないこともあるだろうが、繊細な絵は苦手な様子。本人にとってはシンプルでオーソドックスな絵がよいかもしれない。</p> <p>P：次回、一緒に取り組める時間を設定し、本人の得意な絵柄や趣向を探っていきたい。</p>

これは、「A」に相当する部分ですが、すぐ「I」につながっていますので、このように「I」だけでも構いません。もちろん厳密に、「A/I」としても構いません。

時間的な順序は、「O」「S」「O」となっていますが、このように「S/O」として構いません。

これは、「A」に相当する部分ですが、すぐ「I」につながっていますので、このように「I」だけでも構いません。もちろん「A/I」としても構いませんが、厳密にするのは、それに意義があり、注目してほしい場合にした方が、本記録法の効果を実感できます。

時間的な順序は、「O」「S」「O」となっていますが、このように「S/O」として構いません。

1つ目は、現象をとらえた表現です。
 2つ目は、「P」につながるような表現です。
 3つ目は、その他、利用者のニーズや記録者の気がかり、現象の意味などを表現することです。

表8の例では、「P」につながる表現であると言えます。では、表9の場合はいかがでしょうか。「塗り絵に取り組む」としてありますが、これは現象をとらえた表現です。意味や気がかりをとらえた表現にするならば、「塗り絵のマンネリ感？」とすることもできるでしょうが、この場合、「P」につながるような表現として「塗り絵の趣向を検討」とするのがよいでしょう。

このように、「F」の表現をどのようにするかは、記録者の着眼点や力量によって違いが出てきますし、生活支援記録法の書きぶりにも影響を受けます。そのため、「F」の表現を含めた記録のあり方について、職場で時間をとってのOJTではなく、日常業務を通じたOJTの素材として活用することもできます。

●演習3：添削例を見て項目を再検討する(表10)

表10は、項目の使い方について検討の余地がある例です。今回は、補足の解説をしていますが、誤りではありませんので、皆さんも考えて、分かりやすい場面から試みてみましょう。

おわりに

最終回は、皆さんが生活支援記録法を一人でも練習をすることができるよう、「生活場面面接ワークシート」や「生活支援記録法」の実際について、具体的に紹介しました。

事業所ではさまざまな記録用紙あるいは電子記録のフォーマットを用いて、経過記録をつけていることでしょうか。看護記録で普及している方式を用いている事業所もあることでしょうか、利用者の変化に富む状況や、援助者による利用者への働きかけの内容を記録しようとすれば、記録のしづらさを感じられていたのではないのでしょうか。そこで、福祉・介護分野に適した効率的・効果的な経過記録のあり方として、「生活支援記録法」を提案してきました。

[表10] 添削例を見て項目を再検討する場合

年月日	時間	F	事項
〇/〇/〇	〇:〇	会議の一員として参加	<p>○：フロアのテーブル席でユニット会議に参加した。</p> <p>○：ユニット職員、他職種にも囲まれるが、日頃のかかわりで馴染みの関係になることから、萎縮することなく、緊張感や違和感なし。落ち着いている。</p> <p>S/I：会議の合間に「私なんか何にも分かんないよ。頭悪いから…」と発言あり。周りの職員より「<u>Bさんはそのままです。どっしりしておいてください。重役ですから</u>」などと声をかけられ、会議は支障なく進行した。</p> <p>○/A：会議時間中、終始落ち着いており、<u>会議の内容は理解できないながらも</u>、職員の輪の中で、自然な形で一緒に過ごした。</p>

「○」が2つ続いています。このままでもよいし、1つの「○」にまとめてもよいでしょう。

ほかの職員の発言は、記録者から見れば、「○」として取り扱うのがよいでしょう。したがってここは「S/I」となります。もし記録者自身がBさんに声をかけたのであれば、「S/I」となります。

記号が「○/A」となっているのは、おそらくこの部分を「A」としたためでしょう。このままでも構いませんが、「会議の内容は理解できていない様子であったが」と、記録者による観察内容を表現したものと解釈するならば、「○」だけでもよいでしょう。

「生活支援記録法」は、現在皆さんの事業所で使われている記録用紙と矛盾することなく、同時並行的に活用できるものです。また、職場全体でなく一人からでも、あるいは一人の利用者のすべてではなく一部の場面からでも使いはじめることができることも大きな特長です。さらに、援助者と利用者との日常（援助者にとっては日常業務であり、利用者にとっては日常生活）のやりとりの中に専門性が発揮されているととらえ、生活場面面接についても紹介してきました。

難しく感じられましたか？ これなら日常業務の中で実践できそうだと感じていただけたならば、とてもうれしく思います。

生活場面面接や生活支援記録法についてのどんな些細なご質問やご意見も、いつでも歓迎いたします。

本稿は、科学研究費補助金基盤研究（C）による「多職種協働に有用な高齢者福祉実践の向上を促進する『生活支援記録法』の開発と検証」（2011～2014年度、研究代表者 寫末憲子）および「地域包括ケア時代のソーシャルケア発信型IPWに好循環を生む生活支援記録法実証研究」（2015～2017年度、同上）の研究成果の一部です。

【今後について】

『真・介護キャリア』（2016年5・6月号、日総研出版）にて、「介護プロフェッショナルキャリア段位制度における支援経過記録の重要性～効果的な実践とOJTの観点から生活支援記録法への期待～（仮）」を寄稿の予定。

参考文献

- 1) シルバーサービス振興会：介護プロフェッショナルキャリア段位制度（平成26年度版）評価者 [アセッサー] 公衆テキスト、P.31, 32, 2014.
- 2) 埼玉県立大学連携統合プロジェクトSaipeサイピーホームページ：インタープロフェッショナル演習について。
<http://www.spu.ac.jp/saipe/resource/ip.htm>（2015年11月閲覧）
- 3) 小嶋章吾、寫末憲子：M-GTAによる生活場面面接研究の応用～実践・研究・教育をつなぐ理論、ハーベスト社、2015.
- 4) 寫末憲子：生活支援とICF、介護職員関係養成研修テキスト作成委員会編；介護福祉士養成実務者研修テキスト（第2版）、第4巻 生活支援技術Ⅰ・Ⅱ、P.11～37、長寿社会開発センター、2014.
- 5) 寫末憲子：専門職間における連携、井上千津子他編；介護福祉総論、P.130～139、第一法規、2012.
- 6) 寫末憲子、小嶋章吾：高齢者ホームヘルプ実践における生活場面面接の研究～M-GTA（修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）を用いた利用者の「持てる力を高める」プロセスの検討、介護福祉学、Vol.12, No.1, P.105～117, 2005.
- 7) 小嶋章吾、寫末憲子：居宅高齢者の生活支援—生活場面面接のプロセスと技法の明確化のために、木下康仁編著；分野別実践編 グラウンデッド・セオリー・アプローチ、P.61～90、弘文堂、2005.
- 8) 日本ソーシャルケア研究所ホームページ
<http://www.socialcarejapan.net>（2015年11月閲覧）